

朝  
礼  
〜  
禊

記

|      |         |     |
|------|---------|-----|
| 内閣文庫 |         |     |
| 番 號  | 和 18707 |     |
| 冊 數  | 8 ( 4 ) |     |
| 函 號  | 203     | 125 |



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

詞話  
第廿三

傳弘の讀

淺草文庫

和學講談所

第二十三段

分段生元 三章



赤音日と云ふ陰陽を二つに分くる世昔  
と申すに此の如きは...

と云ふ世昔に云ふは...  
の世昔を易の云ふ世昔に比し





ふいふ一合の矢ささるるにききかすの生を死とおぼす下  
とせさるるにありあらずに死の中よりありては生を死に  
より合点の上より合点の生よりありては死にさるるに  
かたの生と死とをいふにせむるるを死の生といふ  
とすからるるより寂滅生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ

例の生と死とをいふにせむるるを死の生といふ

ふいふ一合の矢ささるるにききかすの生を死とおぼす下  
とせさるるにありあらずに死の中よりありては生を死に  
より合点の上より合点の生よりありては死にさるるに  
かたの生と死とをいふにせむるるを死の生といふ  
とすからるるより寂滅生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ

第二十二段

殿上復験 十章

常盤井相國の生に生を死とおぼす下  
あひあひりて馬よりありたりりりと死を死といふ  
ふいふ一合の矢ささるるにききかすの生を死とおぼす下  
とせさるるにありあらずに死の中よりありては生を死に  
より合点の上より合点の生よりありては死にさるるに  
かたの生と死とをいふにせむるるを死の生といふ  
とすからるるより寂滅生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ  
とすの生に生を死の生とて死に生とて死に生といふ

御下

水面とてあられより勅ちとるの上なるしきり  
てんをさるへしあつしすさう

「若のころかこゝと我とほくらうりこゝははけり  
そとあつる穢めくさるるしゆへ軸はけ長け

えはくらうり後あられいつれい難き又の葉を  
おろくちなるはくは葉より軸はけくもはわ

「みまうと作しれし  
かめゆのこゝろあつらふもよこれん人

かめよとゆゑはけられはくはらうりあつら  
えまうととくへし

「そのおははしこゝろのおとはけりやとこあつら  
かしてとさうすありかたは風ありて家より風あり

「因に舞あり小人は舞ありて舞ありて  
傷み法あり

「きつとむひーのひとさうらうりとちほけり  
一言を説とやるはけきりておとるへ

「ふよあひてさうり  
一ちやちやちやちやあつちとあつらふおち

「やうとちやちやとちや  
一たせとちりひるは穂は穂ひしもおち

「ありおひひさうらうらうらうらうらうら  
やうとちや

「一 道世ををさるることわちやとほしひて  
らう最上のやうとあつち

「一 上層を下層とあるは智者の愚者よりあるは人  
の合ふとけりし能ある人の中へ能ある人

一 作及とねふらふらふのすりあしとまあるふ

はありて世のすりとふらふねと申一のたふ

はあてあアしすもおわしは

堀河初國を及男のきりきりしてそのすりとか

る奈とふらふねいまり一子其後々と大御よ

きりて歴弊おこるれりるは歴弊の唐櫃はる

とてきりきり作てあしとふらふら一子一子

れりるは唐櫃の上たより傳りてとねとふら

あふ年とふらふり累代の公物古幣とりて

親授とすきやすくあしとふらふれりてと

初宴の流友やすりれりてとふらふら

久戦相ふを歴上りてとふらふらとふらふら

お岩とふらふらとふらふらとふらふらとふらふら

とてとふらふら

あふ人任大臣の御命の内年とほとあふれりるお

内記の持りる御命ととてとてとてとてとてとて

まうまうあふらふらとてとてとてとてとてとて

とてとてあふらふらとてとてとてとてとてとて

とてとてあふらふらとてとてとてとてとてとて

とてとてあふらふらとてとてとてとてとてとて

甲、大御言光忠入る追儼の上御とほとあふれりるお

洞院、右大臣歴上り決才とす法られりるは又ふらふら

と申とすりふらふらの女とてとてとてとてとてとて

かの又ふらふら老ふら懐古のよくあふらふらとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

勝而たとりさうへくやゆんともめいやはふほふやと  
まらいつとあうーうりまらと

大是ちる居るくともあの人とも 謎ナゾくとはくして  
とれりるふへく守まらりきりまらふは怪

大和言公ゆて我おの志もあふ守まらふと徒  
くりまられまらると唐カラ瓶ビン子とよふて笑ひあは

りれい版きちてニハテてまら

位曰

け十章を少くおの影ありておやくい殿上の奴度り  
として殿上の常衣殿ちりまらとあるへ一才二才との二章  
二段の中のおまらりておのくかてい故堂の文格  
とほくをまらゆこの秘方の筆まらこのやう用らるふ  
或は悪好の意にりりとも或は秘するともあらはして世

まらけありまらにせりまらにせり此の秘方ちやて

清水儀平の觀音をまらにせりまらにせり

三章より十章の間の積債ありけ中間まらまら

か何お孫の二階まらまらまらまら

まら固賊小賊の二箇とまらへく一てまら

又勢ちりとまらまらまらまらまら

て法おのほまのまらまらまらまら

とちいてス箇の二箇とまらまらまら

く一てまらまらまらまらまら

るをちいて殿上の控をまらまらまら

の殿上人とまらまらまらまら

これいほれくまらまらまらまら

のまらまらまらまらまら

天竺



筆力ありしはくむかひあつて又まゝなまゝしりて世の  
接政とおもはしむらんしりたるはさき名に二名ある  
しりたるゆゑとあつて一の名はあまのこの世のを統  
とひ父子なりやねとやなりけりかてきてきよめ  
こゝろありあしふの命は名の長きこゝろあまのこゝろ  
次は之れお玉いふと對しては所貝と名する一と土器  
もはげしむるのむかしからあつておのきやすもくかへ  
とあつたりむかへゆれと似あまのこの世の名のちり  
くさくさく人いへりあまの目もまゝしりてきよめ  
其の又世とあつたりやあつたりオハオハの殿上の御食  
ふかしの席相々もえたりも同院殿の御食とあつち  
くろとあつち一とあまの御食のちりてはつて御の  
筆はあまの目もあまの目一とあまの御食の又あまの  
かごりてあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
あまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
殿上の御食とあまの御食一とあまの御食の二柱一唱も  
あつて是と信長殿一字の御食とあまの御食一と

讚曰

さらや人向世の信長殿とあつたりはつたりとあまの御食  
あまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
の實りたるゆゑとあつたりはつたりとあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
う謎の長きあまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
とあまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
こゝろとあまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
ひいておとあまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食  
この世の信長殿とあまの御食とあまの御食一とあまの御食とあまの御食一とあまの御食

信長殿

と言はれぬの虚言と云ふ事あり人ぞ小凡聖のさへ  
 とあるべきと人ならぬの謎は喜怒を以て或  
 ら釈迦をもち孔子とや一或は博學を以て  
 不學とむむのめは是と人向の徳を以て  
 さて法がよき風の一説と傳へて儒教老莊乃  
 同異とありそひ王比夷齊の忠義とありされ  
 と云てけ段はかつて川むむの喧嘩もよ  
 是れふねの殿上人の對して國は賊あり小くお  
 然ありといひ二句とめて彼とせしむるはよふねの  
 文より遺言とせしむるはいつとふの作  
 とんあるべき也と云ふ君子は仁義ありす偽は  
 ありすと云ふはいつとてけ段のなきはよふねの  
 さていつとあるふある人の信解はいつ段を以て南人

辨

隠逸の心よりわたり世を思ふは之を家と云ふは  
 辨曰け段の心とわたりてありおこふは放辟邪侈の  
 名とちんのもよありと云ふはいつの無二好も罪を  
 ありすと云ふはいつとわたりてありは無二好と信人  
 ありと云ふはいつとわたりてありは合と云ふとよ  
 一は是ははれくの大子ありて作るは罪とおよ  
 とよはきけ一段の信解ありすやを妻よいつとひ  
 ありと云ふはいつとわたりてありはいつとよふ  
 といふは倫と南人隠逸の心よりわたりて天下の控  
 ともかひいあるかき世とわたりてありはいつと  
 せありすと云ふはいつとわたりて作るは罪とおよ  
 のかひとわたりて作るは罪はいつとわたりて  
 されはいつとわたりて作るは罪はいつとわたりて

君子に兄弟ありて又工とに解して傍にあり  
て又不いといふ事ありて一なりともんからせしむる  
人に委くさり傍にほくささいありちをほれく  
一部の越して今もい何ぞておらうとさうする  
とや或はそのる入るもよおとあやうにひ  
そりてよりいよ東あまの海一から作志に  
解とよおのるれ、虚空よくおとりのり  
まらうといはれく、困人隠途のあまののこりて  
君はほく家とあまのちるを腰注のるなま  
へいも解あまのちるをほれくのたすおらて解  
一器とおあすへとい一破のほ解ありまら

辨曰

作君子に兄弟あり傍にほありてこらよすい  
と水に船ありては風のちとあまのり似るるなりや  
君子ありされに委くあまの傍ありされにほく  
んまらと解ふ、船ありて進退起卧し自在あり  
とかりありその船とまのちしむ時ふ今のの變化  
のこくちかてくれい或は青天とちかたらて此  
のち相いんすあり或は白日の風あれて幸  
此れもあまのちるその時、船にまのちあて君子  
も傍に小人も傍志のに委の十哲口もも仰志のほ  
の十大夫子やみあ一念の水底<sup>ミナソコ</sup>も志所とて人而  
一生のたあ、と委ひす、一切唯心の實にほれ  
ておときめいこらふちのちあまのちる  
へ、その時無心のる人ありて傍に君子  
まをけらるをほれくと従ふる、應實自在の





馬に入ると女の子ありあひこりまらうわひさまら  
 男ありくしきして夏の馬と堀へかきしてり  
 ひーアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 指鞠ふまの部の中子いよふ比丘より比丘尼を  
 とりり比丘尼より優婆塞いとりりりりりりりり  
 優婆塞いとりりりりりりりりりりりりりりりり  
 のあつて比丘と堀へ入るるるるるるるるるるる  
 たりといこれりりりりりりりりりりりりりりり  
 やんえりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 て何とよそ非修非子の男とありらまらりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 馬ひりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

女のおひつをとり返すりりりりりりりりりりりり  
 男ありりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 まりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 やりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 大お言さやありりりりりりりりりりりりりりりり  
 つれまり堀河内大臣殿い思合してすてゆい  
 ーやんと作されりりりりりりりりりりりりりりり  
 めりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 女と女にれぬやりりりりりりりりりりりりりりり  
 お、面白殿いおさあくてお花の院のりりりりりりり  
 たりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 くの作されりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 下女のりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女

十四

世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女  
と云は作られし世のあまのむらぐらに女

とい似たりぬ一段の程をとりておれの本とせしむ  
 けしむら十一量の物とせしむらくけしむらとせしむ  
 の物空を流し流すと傳しむら例の程の古風  
 ありてけしむらの程の程の程の程の程の程の程  
 けしむら色致とせしむらおれおれおれおれおれ  
 もあはれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
 らしておれおれおれおれおれおれおれおれ  
 るおれおれのけしむらのけしむらのけしむらのけしむら  
 おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
 わけの程の程の程の程の程の程の程の程の程  
 の程の程の程の程の程の程の程の程の程の程  
 ありてけしむらの程の程の程の程の程の程の程  
 あはれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
 おれおれの程の程の程の程の程の程の程の程

かつこの筆はさしてこととしてててててててててて  
 かつこの筆はさしてこととしてててててててててて  
 一節の筆はさしてこととしててててててててててて  
 取捨程を疑いとしててててててててててててて  
 寸隙ありて人あり是よりてててててててててて  
 ありてててててててててててててててててててて  
 是とててててててててててててててててててて  
 商人の二種とありててててててててててててて  
 といふは是とててててててててててててててて  
 急いしててててててててててててててててて  
 きて今うの一念おれおれおれおれおれおれおれ  
 ありて我りのけしむらのけしむらのけしむらの  
 けしむらおれおれおれおれおれおれおれおれ



又ふまむ紙ふらいつらまふの凡何ぞを可き事とせし  
 此一日の中又飲食便利暇暇言語行歩やむ  
 と云ふ事してお不くの可と云ふ事と云ふ事との  
 しくもあつぬららる中をの可と云ふ事との  
 事とりし事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 あり事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 謝天運とは華の筆授ありと云ふ事との可と云ふ事との  
 風中の可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 光陰ありの可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 およせ事たりと云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との

後日

此一章の次の事すはてして危病危の可相あり  
 老人のそつら人の遊遊と云ふ事との可と云ふ事との  
 人のそつらしてし抑やさる事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 ねしやさる事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 不知の事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 の事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 の事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 凡そよきけれほき流水の事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 境畧と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 信りてし事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 入着人の事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 了ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との  
 老の文事と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との可と云ふ事との









その人の罪をさしてついでに東遠の恨より好  
 ましてその人はいはぬにほふらるる也或は二條を其を  
 け或は同院の英雄をかきせめてある人かうして作ら  
 りて居てあるにあらうなり人せ或を公卿公家あり  
 りの比敵の通をたとりつひらるる世情の存對を  
 するに似せしむ彼をあるありありしてついでに  
 作らるるありありに似せらるる世情の毒あるにせし  
 の心なるといふにあらうなりとせしむらるる世情の毒  
 伴うしてついでにあらうなり人の困むる際難い日と  
 るに好色飲酒よ老とされしんかぐ余ある  
 ちうとてけりしとありとせしむらるる世情の毒あり  
 臣解らるるついでにあらうなり世情の毒十倍の狗を  
 人の面れとせしむらるる世情の毒十倍の狗を  
 我々の形容と人よ講る是まきし古今の人情ありて文章  
 の上の趣きとつとありてついでにあらうなり人の心むら  
 けの筆はふありとせしむらるる世情の毒十倍の狗を  
 ころのそとそれとされしと存のあきまきしんせしむら  
 罪あるがてあるとついでにあらうなり世情の毒十倍の  
 ありて例の諷詞とありてついでにあらうなり人の心むら  
 諷の親切あるとついでにあらうなり世情の毒十倍の  
 けりてついでにあらうなり世情の毒十倍の狗を  
 せしむらるる世情の毒十倍の狗を

第二十六段

異名異説 四章

とい何のおふい殿後殿一かりりるふありて川の  
 ころりふあつたの遠れらるありてさいと丸は牛と進

とらひれいあぶこのふお板かえさしとがかりらると  
為別内車のまうりしけりる希有の事とふか  
おうては牛とて追ふのしりひりられおふい  
はまーさあーくありてよのれ車やんこのま  
しやうりてえまー希有の男ありとては車  
頭とてあらあせれまうけい各のまいま  
まの男料の牛飼まーけを秦系とす  
女房の名も一人いひまて一人いひま  
まはけり一人いひまて一人いひま  
宿河系とふおまてぼろくおなくあつかり九  
の念仰とP字かまより入るぼろくのり  
いは申よりつらとP字とPなるやおり  
るまて中よりつらとP字とPなるや  
張とまねつら林字とPなるやまのれ、  
とP字とPなるやまのれ、  
まりといふとP字とPなるやまのれ、  
まひてるP字とPなるやまのれ、  
おりつらとP字とPなるやまのれ、  
な場とまーつらとP字とPなるやまのれ、  
あまーつらとP字とPなるやまのれ、  
おあまのつらとP字とPなるやまのれ、  
とつらとP字とPなるやまのれ、  
まはつらとP字とPなるやまのれ、  
りのつらとP字とPなるやまのれ、  
梵字は字とP字とPなるやまのれ、  
世とつらとP字とPなるやまのれ、

張とまねつら林字とPなるやまのれ、  
とP字とPなるやまのれ、  
まりといふとP字とPなるやまのれ、  
まひてるP字とPなるやまのれ、  
おりつらとP字とPなるやまのれ、  
な場とまーつらとP字とPなるやまのれ、  
あまーつらとP字とPなるやまのれ、  
おあまのつらとP字とPなるやまのれ、  
とつらとP字とPなるやまのれ、  
まはつらとP字とPなるやまのれ、  
りのつらとP字とPなるやまのれ、  
梵字は字とP字とPなるやまのれ、  
世とつらとP字とPなるやまのれ、

園侍とくとも放逸を慙のありまをせねや  
 死と死くくしておのれをいかにせむ  
 おかして人のかぎりなくははげなる  
 寺院の號さるる方のゆも名とはく  
 の人らもくも求まざるあり  
 かるやいひはくあり  
 えずゆらとじつ一人の名も  
 とすらざるあり  
 異伝とみむはは女の人の必  
 ちなとすらざるあり  
 ニんこと人との病をく  
 ぐスうをけくつては  
 へせらぬあり

後回

けいさの前後の變化あり世より  
 似てそれよはくしての  
 の半節よりけを  
 いはくきて孫よふ  
 とちやその尾は  
 されといふ事よ  
 ころとよきや  
 念比や次を  
 又よりきりて  
 次よりきりて  
 のあるよりあり



するにせむくもむとらひくして累をばれくの御  
 休者のささとりある一むお殿も十余人の官  
 ありてさ位の人あり若輩の人あり無病の人  
 有りほ色の人あり武勇とさのおの世のそれ  
 ありて嘘とばくするの世の人ふあんとて  
 名刺はかわれて歎かき人のあつて七換  
 の雲をいれよその世の件あるとある一お  
 人間の好悪を今世の無さをとりよふあ

護司

ある書ある人のひきまふたふた又まの  
 したんふいふてのをあつるるか  
 くとく一てのくあやうくりりて  
 きつある変化自在のまるとあつ入ひと兼好は

世々のまをあつてこれ七換とまのまひひ  
 の好悪をささるに若もあれは休あつて  
 すとくとまふ一それ他の好悪今世の  
 きく眼あつて虚とつるそのれ作者あつ  
 或い実あつて虚とつるそのれ作者あつ  
 そのれ的好悪ささるる一とつるを  
 とつあつて法あつての論ありて實は金銀の  
 りるあつてとつる例は兼好とつるや  
 とき一あつてとつる説あるもや件の正に  
 とい才一とつる業は付属して才二とつる國王大臣  
 ありて若くは檀那は付属して才三とつる  
 孫説してけいれあつて大かつてとつる  
 仏は度量の人ありてかつてとつるのたれ

可致の子とてとてとかくはほむらふそのたのみの可の虚室  
 とまひしるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 あうし金りちとつんれはさうりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 りのほ花老の家のまを地みりて虚無のたれが  
 うりやうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 海はけさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 とお對してゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 のおうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 びりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 あうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 ちはけさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 ます方のあうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 じりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

辨回

天は月信く地はも雪りより万物の名字ありて  
 月入るおのまをさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 じりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 てあけぬかそさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 名よいらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 しむりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 丘も尼もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 その名もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 名はくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さいりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
 てもあはれほ口のオ子の不なりもあうさうさうさうさう



よや人の後とてたる所のわかれらるる後の人とて  
よみあふねい人のとて言流よあふよへく後  
後とて栗材よあふよへく言文のさく  
あふよへく言文のさく言文のさく  
とてやとて後より人としてやわ

第二十七段 庭園不忍 三三章

裡のあゆみのゆるりねをぬきけりし  
腰もほくらあふねいねくらあふねい  
しとあふよへく言文のさく言文のさく  
ありあふよへく言文のさく言文のさく  
ははるあふよへく言文のさく言文のさく  
らとてやとて後より人としてやわ

中宮のあゆみのゆるりねをぬきけりし  
腰もほくらあふねいねくらあふねい  
しとあふよへく言文のさく言文のさく  
ありあふよへく言文のさく言文のさく  
ははるあふよへく言文のさく言文のさく  
らとてやとて後より人としてやわ

世のまよふあふよへく言文のさく言文のさく  
らとてやとて後より人としてやわ

そのくさるやーふろと中宮の御方下と信お  
の同段と云ふれし是の味一て別段と云ふ  
やまろふそれの比段して中宮の御方下と信お  
のらにふいりおすされて第九と云ふは是の中宮  
北條義隆より中宮の御方下と信おの御方下と信お  
のむし殿のそのせあつても作るの御方下と信お  
あつて一と云ふは中宮の御方下と信おの御方下と信お  
のに誅ありしとおとろくく一と云ふは中宮の御方下と信お

證曰

これの比段の御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
し厚の御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
て御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
と云ふらるる一と云ふは中宮の御方下と信おの御方下と信お

おろりもいひそま料記して中宮の御方下と信お  
いれも中宮の御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
あつて御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
まよの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
つりも御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
らると御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
の御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
勝方とあつて御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
博識の御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
と云ふは御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
いふまの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
あつて御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お  
是の御方下と信おの御方下と信おの御方下と信おの御方下と信お





注曰

一人の才能、聖の教と云うべきなり

次、子とありしは

次、段とありしは

次、ら射馬とありしは

次、言ハ人の天ならし

次、細工の業かゝる

右一條は在は也次、スケ條の小書は、まふ嘘也

いなり、天子の多能と云ふ所、古語とひい

ハ例の通場と云う、一、早亮の聖を教と云ふ、

詩、新、美、孫の傳、又、下り、天下の自、能、は、お、か、り

一、と、その、世の、人、れ、あり、ま、あ、り、れ、おの、手、は、

か、や、う、あ、り、ぬ、れ、は、金、銀、の、聲、と、い、ひ、て

君臣の世を、とらけ、し、り、時、計、の、訓、詞、と、い、ふ

の、下、り、し、よ、一、一、され、は、法、おの、趣、よ、世、の、と、一、せ

人の、つ、り、ち、あり、と、は、下、れ、も、作、る、の、文、武、設、け

調味、お、二、ち、と、い、て、は、れ、く、の、さ、り、さ、り、あ、る

と、や、げ、て、世、情、と、あ、り、も、り、作、る、の、さ、と、推、す

る、一、志、う、は、は、は、り、美、孫、も、も、あ、り、て、有、益

の、お、あ、り、ぬ、と、手、お、を、動、う、て、世、と、信、ん、り、ハ

笑、孫、よ、や、り、さ、さ、て、民、と、り、つ、ら、む、ら、し、その

世の、政、及、と、情、つ、と、ら、る、果、好、の、宗、の、推、也

世の、益、の、さ、り、と、あ、り、て、何、と、ら、い、と、を、思、あ、り、人

解、了、り、さ、ら、く、も、い、ふ、一、一、國、の、さ、あ、り、る、の、さ、

よ、止、む、す、と、あ、り、て、あ、り、す、と、さ、り、さ、り、あ、り、あ、

あ、り、の、さ、と、あ、り、は、く、あ、り、す、と、い、ふ、一、一、人、の、あ、



止むべきとわすれていひあむお事一と合ぬお事二と  
 まるお事三と存るお事八箇のたすけに之はさ  
 ぬすまらうとわするまらうとされまらうと聞て  
 聞て一とせん他人の病あり病ふかされぬ  
 と熱志のひさし一醫者療とことごとく一しれま  
 て何の事おわらうと合し一とすけいにかげらうと富  
 りうとすけいのかとむらうとあむと本意  
 何の子候お事一誰のくうきとすことと  
 何日

一やまのりし附とらうとす

右一條はふのたまの雅語より一と愛  
 の二字とちあたらうて又武醫詞味おこと  
 はよりまらうとすこれ樂射御書あや

いさくやまの地ありとあつハ佛はくあつ世は  
 もあく我もあく人もあく君臣明友の程居  
 もあふんとす一筆一放下とらう又勢あり  
 されも國のさち君のさちと不わ止のさち  
 らうとせはさちとくく人のさちあつて次ハ我  
 のやむすとおわらうと衣なむ後のこととち  
 とらぬあのおわ止といれ味と一是れさち  
 養をせらうとあつてはれとらう  
 とさちの山あつとらふおとふおわ止のさち  
 らうとされを衣信位のことと押あつて天下の  
 名用あらうと醫者療とくして何の事とら  
 作るのさちとらぬとす也誠は衣信位のこと  
 ハ天地の自他あらうと過不及のさちいん人のあや

カク之に

まらあうりまは候所の二子とちあとり作ふ  
のふちまらあとり

「是はは解を解ち字又をばらばとては子匠と  
きこすまきこめまらあ仰してやまらあふ世に  
る可ありまらああ」

「人よとてはては十九日の仰すはある事と信  
ひしは説ははてはてはてはてはてはてはては  
る所仰りては解すの人まらあまらあまらあ  
はまらあてはてはてはてはてはてはてはては  
は或者の云信もはてはてはてはてはてはては  
あんてはてはてはてはてはてはてはてはては  
まらあまらあまらあまらあまらあまらあ  
又人よはまらあまらあまらあまらあまらあ

「あんとてはてはてはてはてはてはてはては  
二かてはてはてはてはてはてはてはてはては  
頭とてはてはてはてはてはてはてはてはては  
かあ人よはてはてはてはてはてはてはては  
まらあまらあまらあまらあまらあまらあ

伝曰

- 一 念仰て世とてはてはてはてはてはてはては
- 一 まらあ人のあまらあまらあまらあ
- 一 又人よはまらあまらあ

右之ケ條はあなまらあまらあまらあ  
虚実自在の掟もあまらあまらあまらあ  
二まらあ二虚とてはてはてはてはてはてはては  
時ハナ之まらあの中北犯言もあまらあ

とおひの殿と人よほすしむる殿とが向す別殿  
 の又おろりと又人よとちほくきてはくもる  
 とほくともろく定と家殿よきつり時ハ各供  
 又の一字あるりまねてお給の勢よとよ  
 志しよはおのふはあつて或いはちやうの好意  
 うしおひ或は剣をくともろくす所はかめ  
 あるとあし証おしては名の騷動し例の斜  
 ありす定は一層のやうささふねの定了り  
 とちりしやうんよささくり歴との証よ及  
 ちんを作者も今ささの速或あんとた  
 けくらの有るまかりておあくうち入んとさ  
 およらうはへうすまろくはきて勝一す時  
 のいんわんともろくへ一も時ともろくとよまはくち  
 とよあうとあつるりよ

位

一博奕し時とあつるりよ  
 右一ヶ條ハ例の抑揚ありて或はあまよはくち  
 一病一奥の囁きもあつす或はねまよはくち  
 くらや蒼有るその証よしあつす定はけねの  
 一ヶ條ハ勝負とす一むくまをあつるり  
 又まよの一けりて定とちよ土まの格とよ  
 或はあひてらまひてやとほくちよ上  
 けきてらむ時ハ右後の長短よかあひ  
 是きく勝負のおよとあつるりやまよとん  
 一くまはけり又まよとあつるりともろく定家  
 の家の秘授とやんりよ

つあきまてをなすくひあつちめとりとる

一あつちてのなすくひ

右一ヶ條は作者のなすくひにて十ヶ條の要致は  
 一ふたふたおふくけふちありて短く長  
 短のほど用ひわたりされ世間の好意より實  
 と虚をとりてて幻の戯多へたとりて  
 いたすヶ條の好意をてもあつちてらふよを  
 ゐらするあつちの申の人をよる虚の虚  
 ふられて自己とまひ實の實ふあつて自己  
 とまひふらひの虚實をあつちてらふよ虚實  
 とまひあつちの申をちるわい二まの徒話ありて

つらふ人の針とをむめんど

「雅房」大和言の「てく」は、まゝに大和言を  
 とやとおろくは比喩のとありあつちて今あは  
 せりといふとてふらつてしよられし何なりと  
 とりをたひらつて雅房の言ふらつてしよられし  
 ためのあつちてらふらつてしよられしつ  
 としよられらつてしよられしつ  
 のはまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
 此人をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
 誦ふといふやまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
 をたひてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
 といふといふありまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
 いてあつちてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
 まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

夫の子と云ひ親とあつて夫婦と云ひ  
 ねとつり歎おなく死とあつて命と何と云  
 せし又累痛ある故に人なりも中なりては  
 彼ららるゝとあつて命と云ふはむす  
 けりかかるといふて一切の有性とて  
 心ふん人倫ありん

顔面を人々方と云ふは心と云ふは  
 心と云ふは又いふは心と云ふは心  
 ありて心と云ふは心と云ふは心  
 ねとつり歎おなく死とあつて命と何と云  
 せし又累痛ある故に人なりも中なりては  
 彼ららるゝとあつて命と云ふはむす  
 けりかかるといふて一切の有性とて  
 心ふん人倫ありん

夫ありて人倫ありん  
 心ふん人倫ありん  
 顔面を人々方と云ふは心と云ふは  
 心と云ふは又いふは心と云ふは心  
 ありて心と云ふは心と云ふは心  
 ねとつり歎おなく死とあつて命と何と云  
 せし又累痛ある故に人なりも中なりては  
 彼ららるゝとあつて命と云ふはむす  
 けりかかるといふて一切の有性とて  
 心ふん人倫ありん

は日

一殺生と云ふは  
 一人民と云ふは

右ニケ條ハ天下の徳也カ  
 こゝにその二あり

しよ有是のるにとつろ又まの事他は折ら  
入おてろつらんやされい雅彦の事いおの事  
あふんよたのあい臨あふたろく言ふ作志とい  
入めさあふかよ入るんころり是の世の闘を  
の遊あし殺せの政速とつよくして雅彦乃  
言ふいふをさるるころりやけしして言せの事  
として作志の胸次はくころりや次は四ノ事  
へその世の苛政とあられむころり時と臣の志は  
奪すころりすの例の経説は胸次とけくして  
雅彦以下とい箇の事言ひ臣の志のひきとるあれ  
はそげしして慈悲の二子の度大なる事や  
對しり戲言の事とあふすころりは法おの事  
ありて之破め解まると破入しして政るめ不にと

端とらんすの例の事入りあやなりころり  
およあそつよとまけて入るころりい我れと  
けりて人と先よころりころり美のあそひは  
勝負とらむむ人からして真あんとあそひは  
う言の事ころりころりころりあされいわけは  
あふあそひころりころりあされいあて人と  
ころりころりころりころりあそひの真あつる  
人よあふくころりころりあふくころりころり  
はふころりころりころりころりあふくころり  
けりあそひころりころりあふくころりころり  
真とすは又れとあつすはけりあふくころり  
あつてあふくころりあふくころりあふく  
あつてあふくころりあふくころりあふく

きく学向してその智と人々をさへんこあひし  
たときあふとあふし善くならすよあふあふ  
へふれといふすとあふしあふあふあふあふ  
利とさくひかきく学向のらうしや

は

一書の勝負とさういふしうらうら

一書一巻の當時の控せしむ博愛又時とさういふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
まふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あり或の勝負は二書ありてさういふあふあふ  
はあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ

さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ

さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ

は

一書一巻の當時の控せしむ博愛又時とさういふ

さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
さういふあふあふあふあふあふあふあふあふ

又ほるゝ左記の體裁とのおりけの體裁の相合  
 ともくふくすこふ一併するにけり今りの變化  
 としひ儒をいけり今りのたれとていふは  
 のれふいけりいふりけり今りのたれとていふは  
 ありあやうきふくしけり今りのたれとていふは  
 て今りの儒をいけり今りのたれとていふは  
 つよあやうきふくしけり今りのたれとていふは  
 して今りの儒をいけり今りのたれとていふは  
 不對して左記の左記の體裁とていふは  
 海よりいふに成るとして今記の體裁とていふは  
 を今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 かん大いなる地をいふは今記の體裁とていふは  
 一文の成るはけり今記の體裁とていふは

讀

今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは  
 今記の體裁とていふは今記の體裁とていふは

今記の體裁とていふは



あふくそよりかゝるもあつちかちりたる文解やとみる  
 一雨はひるさうしきりしりくさうしきりくさうしきり  
 みけ條の作るの福のさうさうさうさうさうさうさうさう  
 衣合位よりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 何う用あらんと作るのさうさうさうさうさうさうさうさう  
 山家として小説るさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 るあせもさめてしきりしきりしきりしきりしきりしきり  
 浪もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 いささかおろちんさうさうさうさうさうさうさうさう  
 醫者と福々の後法のもあらんさうさうさうさうさうさう  
 ちいさしきりとちいさしきりとちいさしきりとちいさしきり  
 とりの叙伽小れ子さうさうさうさうさうさうさうさう  
 一さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

の可念と親さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 ちくちる男子を合さうさうさうさうさうさうさうさう  
 せぬ眼のほるさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 一あつちさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 の條はいさをさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 七さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 一虚の嘘あるさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

又卷之二

三十

此書のありては第一節の儒教あるはつづれの  
孔子のありてはつづるはつづれの善好く是を  
とつりありてはつづるの自在とありてはつづるはつづる  
一部のありてはつづるの儒教のありてはつづるはつづる  
ありてはつづるの佛はつづるはつづるの善好のありてはつづる  
壁を畫きつて當所の人のつづるはつづるのありてはつづる

第二十九 自己不昧 五章

このおの作るを自らみ厥きつづれてはつづるの名ある  
ひつづるのありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
はつづるのありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
かたのありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる

このおの作るを自らみ厥きつづれてはつづるの名ある  
陽を自らみ厥きつづれてはつづるの名ある  
のありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
はつづるのありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
を自らみ厥きつづれてはつづるの名ある  
はつづるのありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
ありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる

このおの作るを自らみ厥きつづれてはつづるの名ある  
はつづるのありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
ありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
ありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
ありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
ありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる  
ありてはつづるの善好のありてはつづるはつづるのありてはつづる





一土備しひと尸たりけれん其のあてててあ  
つれつたりんらとさつりしてけりゆりさあほ  
とつされつらとさつりしてありてあもふ  
に曰

け五まの知不知のさふより自性自説の及  
とつらつあの一まの實りてなめ二まの虚  
よりあねい虚実のありらひりてさ念後  
の二まの二一政の結語とあふ一さつとまの  
二まの二禁裡仙院の法とあひて春端の文  
おのさて似かひいさるえねの二まも殿上乃  
は法とつれ例の教孫の筆はありて教孫の  
中の一様おらり一され後の一まより自己れ  
なめとちりて始終を知不知の二まの人の

一すいんゆれも我う一人とさつらり人向の是非の  
よめはねやひぬえとめれとさつらとあえれ  
人とつ一と一の部の子と上とよてつ下と  
十箇の不知とさつらりさつりいせを病我の  
は相たり人向一せの形容らり一人のつらさ  
とつてとつらも目とさつら指さつりてさねとあて  
さねとさつりい何そさつりてさの力とやすかさ  
やあんのあつて言説さつりやさつりさつりや決語  
て我の二まのつりて作えよはねの観はあれ  
おえねつとつり一まとさつて不知の二まとさつ  
さつらや或の中向え他さつらあは足又平直の法  
されい次々さつあつらけの二まの全く知不知のちり  
あつと法あつて過言のしりちとさつり書し五指



天竺之

知れ不知れおふ一陽あふんしんふくぐ一をふら  
しんふらありとれ

辨曰

あつ知尚あり人のくしてきるふきりかまぬふゆり  
かまぬふとゆれ一とそく人のゆとて不識と  
そくふ知いふ達とこそるれき種のもふと  
とそくふら版らぬとそくふ博学の人の守  
とてそとけ国の知識ふし草ふふふら  
ふらふふれい同きい知尚のふらふらんとふ  
せふふふふふふふふふふふふふふふふ  
下向Pまかりとて

是れを

